

---

# となりの場所と交わる時

西野了

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

となりの場所と交わるとき

### 【コード】

N8951Y

### 【作者名】

西野了

### 【あらすじ】

短編小説の連載です。

## タクシードライバーのボヘミアン・ラブソング

気がつくといタリアン・レストランの店内にいた。白いテーブルの前に座っている。ちょうど茹で上がったパスタがテーブルに置かれたところだ。しかしその瞬間、店内は暗闇に包まれた。店内に流れていたバロック音楽も聴こえなくなった。

「火事だ！」

どこからともなく、その声は聞こえた。

私は慌てて出口を捜す。だが闇に包まれた空間は迷路のようで、自分が今どこにいて、出口がどこにあるのかまったくわからない。暗闇の中いくつもの黒い影がうろつくと彷徨っている。

しかし、火事だと聞こえたが火の手はいっこうに確認できないし煙の嫌な匂いもない。あるのはただ暗闇だけだ。その暗闇もまったくの暗闇ではなく、どこからか明かりが漏れているようで人が動く姿が確認できる。

私は壁伝いに歩いていると突然駐輪場に出た。スラックスのポケットには自転車のキーと自動車のキーが入っている。私の家からこのレストランまでは相当な距離だ。自転車で来るのならば2時間以上かかってしまう。しかし目の前には確かに私の自転車がある。3年前健康のためにと妻がプレゼントしてくれた、緑色の車体だ。休日には妻とときどきサイクリングにでかけたりするのだ。けれども今の私は疲れていた。体が泥のように重い。

私は自転車を利用することを諦めて駐車場に向かった。そこには私の愛車トヨタセリカが待っているはずだ。しかしその前を黒いスーツを着た背の高い男が立ちはだかった。髪の毛は短く、サンングラスをかけているがその視線の鋭さは隠しようがない。鼻は異様に高く唇は薄い。（私はこの男を知っている！）私は本能的に体を強張らせた。

「あなた、疲れているようだから、私のタクシーでお帰りなさい」

男は有無を言わせぬ口調で私を国道に停めてある黒いリムジンまで引き連れていった。

予想したよりも車内は狭い印象だった。しかし目の前にはウイスキーのビンと氷が入った安物のグラスがあった。ウイスキーはサントリーレッドだった。

「家に帰るには1時間以上かかるので、音楽でもかけましょう」と運転席の男は言うときピーカーからクイーンが流れてきた。私はこんな雰囲気の中、フレディ・マーキュリーのボーカルを聴きたくなかった。ブライアン・メイの電子的なギターも聴きたくなかった。この状況では無理な注文だが、チャット・ペーカールのトランペットが聞きたかった。いや50歩譲って彼のボーカルでもよかった。もちろん、そんなことは言うことができなかった。

リムジンは音もなく夜の街を滑るように走っていく。私は落ち着かなく窓から外の景色を眺める。いつもの通勤途中に見る景色だ。

「ご安心を、あなたが帰るべきところまで、ちゃんと送り届けてさしあげますよ」

男は抑揚のない声で言った。

「私はちゃん礼節をわきまえている人間ですからねえ」

男は薄笑いを浮かべて楽しそうに言った。

私はその瞬間、この男とどこで会ったのか思い出した。5年前妻と旅行をしたときに空港でひろったタクシーの運転手だ。私の人生の中でこれほど粗暴で無神経で悪意を感じる運転はなかった。家に着いたとき妻をぐったりとして吐き気さえもようしていた。

私は怒りに震え「君の会社を訴えてやる！」と叫んだが、男は薄ら笑いを浮かべ「旅行の最後にいいスリルだった。チップもなしだよ、ケツ！」と捨て台詞を吐いて去っていった。

「君はあのとときの、ドライバー？」

「あなたのおかげで、私は職を失いましたからねえ」男はなぜか楽しそうに答えた。嘘だ！

私はあのととき妻の介抱で、男のことなどどうでもよかったし、実際

に苦情なども男のタクシー会社に言っていない。

「私はタクシードライバーが天職でした」男はタバコを取り出し火をつけ、深々と煙を吸い込んだ。

「天職を失うと人間、哀れなもんです」男の吐き出したタバコの煙がなぜか私の座席まで流れてきた。

クイーンが「ボヘミアン・ラプソディ」を演奏し始めた。

「そろそろ時間のようすな」男はハンドルを大きく右に切った。突然あたりは暗闇に包まれた。今度の暗闇は100パーセントの闇だった。リムジンのハイビームも一瞬で暗黒に吸い込まれている。間違いない。この男は断崖絶壁をめぐけて私としのタイプを敢行しようとしているのだ。見かけよりも手抜きのリムジンを使って。

いつしか山道に入りリムジンの上下動が激しくなった。エンジンの回転音も上がっていく。男はよだれを垂らしながら「どうです。最高のスリルでしょう？　今回はチップいりませんよ。あははははーっ」と狂ったように叫んでいる。崖の先まではあと僅かだ。

「……あなた」小さく僕を呼ぶ声が聞こえた。

死へのダイブまであと5メートル。

「あなた！　あなた！」

「パパ！」

黒いリムジンが宙を舞った。体が浮遊する感覚がした。

「あなた！」

「パパ！」

目を開けると、白い蛍光灯の光がやけに眩しかった。僕の目の前には涙を浮かべた妻と安堵した娘の顔、それに微笑んでいる若い女性看護師の姿があった。

「意識が回復したので、とりあえずひと安心ですな」

僕の枕元に立っていた眼鏡をかけた医師が妻と娘にそう告げた。

## お好み焼き屋の憂鬱

「てめえ、ぶつとばすぞ！」  
「だって」

そう言い終らないうちに、黒い制服を着た中学生が吹っ飛ばされた。彼の座っていた椅子も「ガターン！」という激しい音とともにひっくり返った。

「ムカつく！」

カミソリのような目つきの男の子が「ダン！ ダン！ ダン！」と足音を故意に響かせ、そのお好み焼き屋から出て行った。

「痛いっ」

頬を押さえながら吹っ飛ばされた中学生が起き上がった。

「だから村井に逆らったらダメって言ったじゃん」

同じ制服を着た小柄な男の子がお好み焼きをパクつきながら、平然と言った。

「あいつ先月もサッカーの試合で木村っちの鼻の骨を折っただろ」  
隣に座っている長身でやせぎすの少年は少し嬉しそうに話題に加わった。

「あーっ、いつててて。顔の骨は折れてないみたい。村井のバカ、俺が『だけどっ』て言っただけで切れやがって」

殴られた中学生はブツブツ言いながらも、再びお好み焼きを食べ始めた。

10分後、彼らはレジに向かい支払いをすませた。

「あら、あなたたち、1人分足りないわよ」  
バイトのタミちゃんが不機嫌そうに言った。

「えーっ」

「何だよ」

「あーっ、村井の分だよ。あのバカ、金払わないで帰っちゃったんだよ」

3人は殴って先に帰った男の子を「ボケ」だとか「ビンボー人」だとか「セコツ」とか言っていたが、誰も彼の分を支払おうとしなかった。

「あなたたち、友だちでしょ。1人200円ずつ出したらいいでしよう」

タミちゃんはかなりイライラしている。

「俺、あいつと友だちじゃないもん」

「俺も」

「わたしも」

やせた男子が女の子のような仕草をし裏声で言った。ほかの二人はギヤハハハーツと笑った。タミちゃんの右目の上の皮膚が怒りでピクピクと引きつっている。慌てて美人のママさんが彼らに優しく言った。

「あなたたち、ここはともかく彼の分を支払って、あとから彼にお金をもらったら？」

「ちえ！」

「誰だよ、あのバカ誘ったの」

「村井が勝手について来たんだよ」

彼らはまたも文句を言いながらも先に帰ってしまった男子分の支払いをすませて出て行った。

「もーっ」タミちゃんは深いため息をついた。

「今の中学生は、あんなもんよ」ママさんの言葉に「そうですかあ」とタミちゃんは不思議そうに答えた。

「アハハハーツ！ あんたそれでどーしたん？」

鉄板を囲んだテーブルから女の大声が響いた。茶髪の女が携帯電話でビールを飲みながら大声で話している。隣に座っている夫は「スラムダンク」を熱心に読みながらイカ玉のお好み焼きを頬張っている。そのお好み焼きは甘口ソースがドロリと乗ってさらにマヨネーズも層をなしている。お好み焼きに乗り切れなくて鉄板に溢れ落ちたソースやマヨネーズが、ジュージューと音を立てて焦げている。

二人の向かい側には女の子がケータイでメールを打ち、男の子がケータイでゲームをしている。

ママさんはその様子を見て眉をひそめた。以前その女性にやんわりと言ったことがある。

「ソースやマヨネーズをたくさんかけなくても、美味しいですよ」

「ああ、そう」

だがその家族が来るとマヨネーズ一本が必ず空になるのだ。

「エビ玉ありがとうございました」

タミちゃんの元気な声がカウンターから聞こえた。

常連客のジョンがカウンターの奥の席に座っている。地味だが品のよいトレーナーを着ている彼はあまり喋らない。

ジョンは目の前のエビ玉に辛口ソースを薄っすらと塗った。それから青海苔と鰹節を少しだけ散りばめた。そして丁寧にお好み焼きを切り分け食べ始めた。ときどき日本茶を美味しくそうにする。タミちゃんはジョンからこんな話を聞いたことがある。

「ロサンゼルス・ドジャーズのトリー監督は癌を患った後から、日本茶を愛飲している。僕も日本茶が大好きです。身体がきれいになる感じがする」

ジョンの前にいるとママさんはようやくほっと一息つくことができた。タミちゃんも嬉しそうにジョンの湯のみにお茶を入れなおした。

「ここのお好み焼きはオイシーです」

ジョンが伏し目がちにそう言うと、タミちゃんとママさんは顔を見合わせ小さく笑った。

## 割れた鏡から声が聞こえる

僕の得意先に小さな化粧品店がある。その店のオーナーは50代前半の小柄で上品な女性だ。スキンケアをちゃんとしているのか精神的に若いのか、一見しただけでは40代前半で通用する。2年前自動車の自損事故の処理をした僕の大事なお客様だ。

彼女は人並みはずれて勘がよく、そしてまた他の人が見えないもの見ることが出来る能力を持っている。

3月の終わり、まだ肌寒い曇り空の日、僕は久しぶりに彼女の店に立ち寄った。彼女の店舗の火災保険の更新の手続きのためだ。

僕が自動ドアの前に立とうとすると、店の中からサングラスをかけた長身の女性が出てきた。その威圧的な空気に触れ、僕は反射的に身体を横に滑らせた。その長身の女性は何事もなかったかのように足早に去っていった。

店の中に入るといつもとは違った重い空気があった。オーナーは少し困った顔をして「彼女に会った？」と小声で訊いてきた。僕は「ええ、誰ですか？ あの人」と素直に訊き返した。

「興味があるのだったら、あとで教えてあげる。だけど絶対他人には喋っちゃだめよ」とオーナーは悪戯っぽく笑った。

僕は火災保険の更新の手続きを終えると、先ほどの件について再び尋ねた。オーナーは僕のために熱いコーヒーを入れてくれた。時刻は午後7時を回っており、そろそろ閉店の時間だった。

「あの人はあなたの目の前にいるわよ」

オーナーは謎めいた微笑みを浮かべながら言った。  
「えっ？」

僕の前には化粧品とそのパンフレットしかなかった。

「ほら、この人よ」

オーナーはパンフレットの表紙で笑っている女優を指差した。テレビをあまり見ない僕でも知っている、今売り出し中の女優の笑顔

がそこにあつた。彼女はその美しさには以前から評価が高かったが、現在出演中の高視聴率のドラマでさらに人気がブレイクしたのだ。

「へーえ」

その人気女優は人から見られることに最大限注意を払っている人種だ。

「この人、美しい人だけど、ちょっと変なのよ」

オーナーの目が意地悪く光った。

「変つて、どういうことですか？」僕は緊張をほぐすために、さめたコーヒーを口に含んだ。

「ほら、この人の写真を鏡に映すと」

「あつ！」

「ほら、ねっ」オーナーは嬉しそうに笑った。

その女優の顔は鏡に映すと、左右のアンバランスさが際立った。

誰しも左右のバランスは多少の誤差はあるが、彼女の場合は美しいがゆえにそのアンバランスさが不自然な印象を与えていた。それも強烈に！

オーナーは「誰にも言っちゃダメよ」と楽しそうに釘を刺した。

その言葉が、この世界で僕が聞いたオーナーの最後の言葉となった。

僕が訪問した日の次の日からオーナーは行方不明になってしまった。最初は旅行でも行ったのではないかと、友人や家族は思っていたが、1週間経ち2週間経つても何の連絡もなかった。そしてオーナーを知る人は誰も彼女の行き先もその所在もわからなかった。まるで煙が空に消えていくように、彼女はいなくなったのだ。

オーナーがいなくなってしばらくして僕は不思議な夢を見た。

そこは薄暗い店の中だ。古ぼけた椅子や空き瓶がゴロゴロと床に転がっている。しかし理髪店ののように、大きな鏡が3枚壁に掛かっている。そしてその3枚の鏡が全て大きなひびが入っていた。まるで稲妻が落ちたように、左上から右下にかけて深い亀裂が走っている。

「……………」

誰かの声が聞こえる。

「誰にも言わないから」

細く弱々しく、その声を発する人間は途方にくれている。

「あなたの秘密は誰にも言わないから……………」

3枚の鏡の亀裂から、その悲しい絶望的な声は漏れていた。

「だから、ここから出して」

オーナーは割れた鏡の中から、助けを求めていた。

月の光が僅かに差し込むその部屋で、僕はただ立ち尽くしていた。

## 道の駅の風景

道の駅に着いた。そこは南国だった。4月というのに気温は30度を越えている。道の駅といつても、駐車場は狭く施設も古びていて、寄せ集めのまとまりのないスペースだ。何かの植物展示会のようなものがあり、どこかの農業高校の生徒が駆りだされているのか、つまらなそうに受付をしていた。「日曜日なのに、どうしてこんなことしなきゃいけないの？」と受付の女子高生は思っていた。100%そう思っていた。暑さのためのどが渴いた僕は自動販売機で缶コーヒーを買った。すると、その隣で、薄汚れた女が空き缶を整理していた。いや、彼女は整理していたのではなくチエックしていたのだ。ジュースやコーヒーが残っていないかと！そして残っていた液体を平気で飲んでいた。僕は彼女に気付かれないように、飲み干したコーヒー缶をゴミ箱に捨てた。それから野菜を買っていた妻のところに行くと、そこには酔っ払った爺さんが大きな声で何か喋っていた。僕らに何か問いかけているようにも聞こえたし、独り言を言っているようにも聞こえた。そして彼の喋っている日本語は僕らにはまったく理解できなかった。いやその言葉は日本語ではなかったのだろう。まるでコアラがカマキリの言葉を話しているような不可解な響き……

僕らはその酔っ払いを無視し、そして妻は真っ赤なトマトを1袋買った。娘はたこ焼きを買ったが食感が悪いと文句を言い、結局3個しか食べなかった。かつおぶしも青海苔もかかっていないシンブルで愛想のないたこ焼き。僕らは、その不思議な空間で結局1時間過ごした。

やけに現実感のない場所と時間。

そこは現実とは違った世界だったのかもしれない。そして僕らはその道の駅に馴染むこともできず、足早に通り過ぎた。

屋気楼のような昨年の4月の出来事だった。

## 卓球

娘と卓球をしていると、隣の卓球台のそばで5歳くらいの男の子が泣いていた。

「どうやら負けたのが悔しくて、泣いたらしい。」

若い父親は顔を真っ赤にして、本気で怒っていた。

「負けて泣くぐらいなら、卓球なんかするなあ！」

若い母親も同じように、興奮して叫んだ。

「ほんとに、すぐビービー泣く子ね、情けない。弱虫！ヘタレ！」

2人の大人は口汚く、わが子を罵っていた。

するとますます男の子の泣き声は大きくなった。その泣き声の大きさに比例するように若い親たちの罵声は激しくなった。

僕と娘はしばらく無言でゲームを再開した。

何だか楽しくなくなってきた。

7歳の娘は「お父さん、疲れちゃったからやめよう」と言ってくれた。

帰り道、助手席に座っている娘にさきほどの親子のことを呆れながら話すと、娘は「友だちのケイコちゃんの親もそう。友達と遊んでいる最中に泣いたりすると、親がすごく怒るの」と、静かに言った。僕は曖昧に「ふーん」と答えるしかなかった。

## 坊ちゃん電車の猿

赤いバラの飾りの付いた黒い帽子をかぶった老婆は、車内に響き渡る声で喋っていた。

彼女のあごはたるみ、目は黒目しかないように小さい。笑うと線を引きのように、顔中にしわが浮き出る。赤地の白玉模様のネツカチーフを首に巻きつけ、両手の中指には、くすんだ銀の指輪が食い込んでいる。コートは春の到来に合わせたのか、落ち着きのない緑色だ。

僕は、離れた席からぼんやりと、その老婆を見ていた。ふと、その老婆と目が合った。彼女は上唇をにっと吊り上げた。黄色い汚れた牙が見えた。

「猿？」

（猿と目を合わさないください。襲ってきますよ！）

周防猿回しの人が出た言葉を思い出し、あわてて目をそらした。しかしその老婆の姿をまねたは、すでに空中を舞い、1秒後には僕の首筋に食いつこうとした。僕は恐怖のあまり目をつぶり体は硬直した。

「キーキーツ！」

僕の頭上から哀れな声が聞こえ、見上げると屈強な車掌が猿の襟首を掴んでいた。車掌は慣れた手つきで窓を開け、ぽいっと猿を放り投げた。

クルリと一回転して地面に着地した猿は、帽子とネツカチーフとコートを急いで脱ぎ、面倒くさそうに指輪もはずし、山に向かって駆け出した。

車掌は僕に「坊ちゃん団子」の入った箱を渡し、低い声で謝った。「春になると、猿にもおかしな奴がときどき、出てくるのですよ。

上手く化けるので、ほとんど気付く人はいないのですが。ここはひとつ穏便に」

僕は、スリルと坊ちゃん団子には目がないので、分別のある表情で頷いた。

## 娘の入院

「娘の入院」

娘が胃潰瘍で入院した。幸いたいしたことはなく二週間くらいで退院できるという。午後から仕事を休んだ。付き添いの妻と交代するためだ。「ちょうど今眠ったところなの。私はまた夕方来ますから」そう言うと妻は何となく急いだ様子で部屋を出て行った。

娘の寝顔を見るのは久しぶりだった。少し青白い感じがしたが、特別顔色が悪いというほどでもなく安心した。それよりも思春期の微妙な年頃の娘の寝顔を、まじまじと見てよいのだろうか。しかし娘は父親のそんな心情など知るはずもなく深く眠っていた。身動きひとつせず、寝息もほとんど聞こえない。よほど疲れていたのだろう。

いつも元気でやさしくそれでいて知的なユーモアもあり、悪いところを探すのに苦労するくらいの自慢の娘だ。もちろん多分に親の鼻肩目が入っているが、それでも中学二年とは思えないほどしっかりしているし、自分の娘ながら感心させられることも多々ある。

そんな娘が胃潰瘍で入院するとは正直少しショックだった。

娘が眠っている間、読みかけの小説を読もうとしたがなかなか集中できない。病室は読書に適していないのかもしれない。窓の外の景色を見ても、すぐ飽きたので病院の散策にでかけた。しかしここはそれほど大きな病院ではないので、たいして時間もつぶせなかった。病室に帰ると娘は目を覚ましてた。「パパ、大事な娘をほっぽってどこ行っていたの？」

娘はほほを膨らませていたが、ショートカットからのぞくつばらな瞳は笑っていた。

「いやあ、あんまり奈緒が気持ちよさそうに眠っているから、邪魔しちゃう悪いと思ってるね」

「あーっ、やっぱり見られた。パパ、年頃の娘の寝顔を見るのは犯罪行為よ。罰金、罰金」と彼女が腕を伸ばしたときドアが開いた。

「奈緒、大丈夫!」

「どう、調子は?」

黄色くけたたましい声に包まれて、娘の友だちが数人入ってきた。たちまち彼女ら独特の世界がつくられたので、私はしばらく退散することにした。

ロビーで少し古い週刊誌を読んだり、自分にはほとんど関係のないテレビ番組を眺めたりしていた。一時間ほどすると娘の友だち達が階段から降りてきた。私を見つけると「さよならー」と言いながら会釈をして帰って行った。

私は病室に戻ると娘はベッドの背もたれにもたれてぼんやりとしていた。

「久しぶりに友だちと会って楽しかっただろ」と私が訊くと「疲れちゃった・・・」と意外な言葉が返ってきた。

見ると娘は本当に疲れた表情をしていた。「やっぱり体調が悪いとき友だち付き合いはしんどなあ」私は少々混乱した。

「奈緒、さつき来てくれた友達はみんな仲のいい子だろ?」

「そうだよ、だけど本調子じゃないときの友達づきあいは神経使うし相当疲れるの」

「神経使う? 仲のいい友だちに神経使うのか?」

「うん」

「そんなにしんどかったら早目に帰ってもらったら、よかったじゃないか」

「パパは全然わかってないなあ」

私はどうやら全然わかっていないらしい。二人ともしばらく口をきかず、呆然としていた。

「ねえパパ去年の夏だったかな、例の力キ氷事件」

「ん?」

「私と友だちが家の近所で力キ氷を食べたとき、お皿の底の方に砂

が入っていた話。そしたらパパが今度行くときはだんご虫を入れてクレームつけて、ただにしてもらえって言ったじゃない」

「ああ、そんな話したなあ」

「そしたらママが怒って、そんな時はちゃんとお店に砂が入っていることを言わないとその店のためにならないって言ったの」

「そうだったかなあ」

「私あの時のパパの話、ナイス！　と思って聞いていたのよ」

娘は嬉しそうにそのときの会話を思い出しているようだった。

それからしばらくすると急に真面目な顔をして、私の顔を真っ直ぐ見つめた。そしてきっぱりと言った。

「ねえ、パパ、お願いがあるの。私ピアノ辞めたいんだ」

「えっ、どうしてだい？　奈緒のピアノは学年で一番うまいって聞いているし。ママも奈緒のピアノ、自慢の種だぞ」

「わかっている。でも私もうピアノいいかあって思ったの。私結構うまく弾けると思うけど、実はこれまで心の底からピアノを弾きたいと感じたことは一度もないの。部活もあるし塾もこれまで通りちゃんと行くから。ね、お願い」

今日は娘から意外なことばかり聞く日だ。楽器が全然弾けない私から見れば、娘の手は魔法のようだ。妻も当然反対するだろう。

しかし娘はどうやら私たち大人とは違った世界に住んでいるらしい。学校で長時間授業を受け、友だち付き合いに神経をすり減らす部活ではバスケットのレギュラーをこなし夜は塾通い。そして胃に穴をあけたのだ。疲れ果てて眠り込んでしまったのだ。ピアノなんか習わなくても娘は娘なのだ。

「わかった。奈緒も少しは余裕をもたないと大変だよな。今回のこともあるし」

「ホント！でもママを説得できる？」娘は不安そうに訊く。

「大丈夫だ、多分……。ママも奈緒のこと一番に思っているし」「そうだねー」

娘は嬉しそうに微笑んだ。私もそれにつられて少し笑ったが、脳

裏には妻の不機嫌そうな顔が浮かんでいた。

「パパ、ほんとに大丈夫？」

勘のいい彼女はいたずらっぽい表情で再び訊いてきた。

「奈緒、パパを信じなさい」

私はそう言いながら、愛する娘を守るためには愛する妻と戦わなければならぬこともあるのだ。家族というものは相当に複雑だ。

腕時計を見ると、もうすぐ妻が来る時刻だった。

## 街で遭遇した3つの出来事

隣町から愛車のニッサンSRVで街に帰ってきたときのことである。国道を南下して市内に入ってきた。左に「TUTAYA」右に「牛角」が見える交差点で停車した。（信号が赤だから）

右手を見ると横断歩道を渡ろうとしている老人がいた。かなり高齢のおじいさんだ。しかしグレーのスラックスは折り目がきちんとついており、辛子色のブレザーに紺色の紐タイも決まっている。帽子もイタリア製かと思われるほどお洒落で、白い口ひげは思慮深そうなお印象を与えている。（なんとなく名探偵といった感じだ）

そのおじいさんの右手には茶色いリードが握られており、その先にはパグが大人しく座っている。上品なおじいさんに賢そうなパグはなかなか絵になる光景だ。横断歩道の信号が青になりおじいさんは歩き始めた。けれどもかなり高齢なので足元がおぼつかない。ゆっくりとしたペースで横断歩道を渡っている。しかし彼のお供のパグは賢そうなので、飼い主の歩調に合わせるだろうと僕は安心していった。

だがその後の光景に僕は目を疑った。ナント！ そのパグは飼い主のおじいさんよりも歩くのが遅いのである。よたよたと短い足を左右に揺らしながら辛うじて歩いている。おじいさんはパグの鈍足にイラついているのか、リードを無理やり引っ張っているようにも見える。意外と短気な年寄りなのだ。

それにこれって動物虐待？

よぼよぼのおじいさんよりもさらによぼよぼのパグ。

僕がよく行くレストランの日替わりランチはハンバーグ定食だった。実は僕はハンバーグが好物である。カレーライスも好きだしパスタも好きだ。こう書くと、まるで子供が好きな食べ物ばかりのようであるが、僕は味覚も感性が若々しいのだ。まあそれはいいとし

て、その日ハンバーグ定食を食べて満足した僕は、駐車場の愛車のドアを開けた。

そのとき目の前の市道をおんぼろのスクーターが紫の煙を吐き出しながら横切った。ブーという間の抜けた音でとるとる走っているのだが、運転手のおじさんはなぜかスタンディングポジションなのである。つまり立ったまま運転しているのだ。そしてその首には三毛猫が乗っている。

なぜ？ 立ったままスクーターを運転していて首に生きた猫を巻いて、はたしていいことがあるのだろうか？ 普通に座って運転しているよりも重心が高いぶん、転倒しやすくなるリスクは高くなるが……（肩には猫が乗っかっているし）。あのおじさんは危険を求めるアブナイ野郎だったのか？ それにしてはスクーターのスピードが出ていなかったが。それともあの行為はドライブ好きの猫のためなのだろうか？

時刻は午後6時半を回っている。世界はすでに夜の帳が下りている。僕は帰宅するため愛車を飛ばしている。するとそのとき右脇からなにやら白い物体が！ よく見ると白黒のぶち猫である。ぶち猫は交通ルールを守らず、無断で道路を横断しようとしたが、僕の鋭い反射神経のおかげで一命をとりとめた。僕は無言でぶち猫に今度は気をつけるよと声をかけた。

それから100メートルも車を走らせてないところでまたもや右脇から同じような物体が！ またしてもぶち猫である。

（今度の猫は黒ぶち猫かどうかは定かではない）

6時半を過ぎるとぶち猫は道路を横切る習性があるのだろうか？ またしても僕の反射神経に救われたぶち猫に気をつけるよと若干イラつきながら無言で声をかけた。

30分後、自宅に着き愛車をガレージに入れようとすると、なにやら生き物の気配が！ そこにはしばらく姿を見せなかった我が家の白猫メイの宿敵黒ぶち猫が、悠然と歩いていた。

黒ぶち猫は、きつと僕に嫌がらせをしているのだ。

世界は小さな謎に満ちている。

## めまいと勝手に回転する脳

朝、目が覚めると天井が回っていた。遊園地の空中ブランコに乗っているような心もとない浮遊感だ。会社に行って座って仕事をしていると同じ症状が出る。(これはおかしい、ただ事ではない!)と思うとますます身体が自分自身でないように感じる。変な汗が脇のほうから滲んで出ている。

課長に事情を説明し慌てて病院へ駆け込んだ。

脳神経外科医は問診をした後、看護師に血圧を測らせた。不安になった俺は目つきの悪い看護師に「血圧、相当高いでしょ?」と訊いた。

その目つきの悪い女看護師は「後から知らせます」と愛想のない声で言った。俺はますます血圧が上がったような気がしたが、胸のうちで(この女は絶対結婚してないな・・・できるわけがない)と毒づいて気を紛らわせた。こんな女の前で倒れるわけにはいかないのだ。

彼女は「MRIで脳を調べますので、身体につけているものは全て外してください」と冷たい声で命令した。蒼い顔でフラフラしている俺はその言葉を聞いて(こいつは絶対、恋人もいないのだ!)と確信した。

MRIで検査を受けている間、俺は今後のことを考えた。きっと即入院だろう。月末に妻と初めての海外旅行に行く予定だったのにキャンセルだ。(行き先はもちろんハワイだ)彼女は怒るだろうか? いや妻は優しい性格だし、俺のことをいろいろ言っても愛しているだろうから、旅行よりも俺のことを心配してくれるはずだ。(目つきが悪くて性格も悪いあの看護師とは違うのだ!)

それから入院費は大丈夫だろうか? すぐに手術をするのだろうか? 医療保険は入院初日から支給されるのだろうか? 頭の中がぐるぐる回っているわりには、いろんなことを考えてしまう。俺は

こう見えても繊細で心配性なのだ。

検査が終わり俺は医師の前に緊張の面持ちで座っていると、脳神経外科医はMRIの写真をみながら「問題ありません。出血もしていないし腫瘍らしきものもない。血圧は上が140で下が100、年齢のわりには高めです。血圧を下げるよう食事に塩分を控えるよう気をつけて、それから運動もするように」と俺の下腹部を見ながら言った。

俺は医師の話聞いて、目つきの悪いあの女看護師が明らかに俺に嫌がらせをしているのだと確信した。血圧値がたいしたことがないのなら、そう言ってくれば患者は安心するのに！俺はあの女を人権擁護委員会に訴えるべきではないかとも考えた。

そして拍子抜けした俺は医師に訊いた。「どうしてめまいが起こるのでしょうか？」「多分耳の方の病気かもしれないねえ。耳鼻科に行ってみたら」と彼は答えた。そのとたん俺の身体は妙にすつきりした感覚を取り戻した。身体を包む変な違和感も消失していた。

俺は急いでかかりつけの耳鼻科に行った。主治医は「またアレルギー性鼻炎ですかあ」と鼻にかかった甘ったるい声で訊いてきた。そうなのだ、俺は4月と10月と2月に鼻炎がひどくなる。しかし今日は耳の話だ。俺は主治医に事情を説明すると、彼は濃い眉をピクピクさせて「じゃあ、聴力検査をしましょう」となぜか嬉そうに言った。

聴力検査が終わると主治医は、「左耳の聞こえが少し悪いですね。左耳の末梢神経の機能が少し落ちているので、それでバランスが崩れてめまいが起こったのでないでしょうか。薬を処方しておきますので、一週間それで様子を見てください。あっ、それから鼻炎の方もね、ちゃんと処置しなくちゃ。鼻洗してね」と愛想よく言った。俺は主治医の話聞いて、歳をとると身体のいろんな機能が衰えてくるのだと妙に納得した。それから旅行をキャンセルしなくてよかったと思うと（何しろ人生初のハワイ行きなのだ）妻の笑顔が浮かんできた。

俺のように仕事ができ結婚できる人間は、自分の身体より妻の笑顔が大切だと思っている。だが、あの目つきが悪くておまけに性格も悪く恋人もいない、そして結婚もできない哀れな女看護師には1万年立つても地球が滅亡しても、きつとこのことが理解できないだろう。そうだ、そうに決まっている。俺は薬をもらい、その耳鼻科を出ると、4月の生暖かく柔らかな風が俺の前髪を揺らした。あの女看護師は今も薄暗くて冷たい病院で血圧を測ったり、患者に感情のこもらない言葉を投げかけていると思うと、少し可哀想な気がした。しかし次の瞬間俺は、その冷たい眼差しを脳裏から振り払い、帰りにハワイ旅行のために本屋に寄ろうとと考えた。

書店の旅行コーナーは広く、何人も人が熱心にガイドブックを見ている。みんな旅行に行くぐらいしか、やることがないのだろう。俺はそのうちの一人、イタリアのガイドブックを呼んでいる女性に目が留まった。ワインレッド縁の小さな眼鏡をかけ、肩まで緩やかにウェーブをした髪がおりていて、シックなワンピースをお洒落に着こなしている彼女は、あの目つきの悪い（と感じた）看護師だった。彼女の形のよい左手の薬指には小さな指輪が銀色の光を放っていた。俺はしばらく放心したようにその美しい姿を見つめていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8951y/>

---

となりの場所と交わるとき

2011年12月1日21時58分発行